

ユーラシアンホットライン

(トピック)

■7月29日(日)のBBQ懇親会のご案内

本年秋からの江東区との文化事業共催を控え、江東区とのボランティアスタッフとユーラシアからの留学生とクラブ会員との懇親を深める為、バーベキュー大会を企画し昨日予約が取れましたので取り急ぎ下記要領でのご案内を致します。

日時 平成13年7月29日 日曜日 午前10時から午後2時

場所 都立葛西臨海公園バーベキュー広場

JR京葉線 葛西臨海公園駅下車3分

東京湾に面し海水浴もでき一面芝生で緑も濃い。入場は無料です。

園内には有料ながら都立水族館・大観覧車・ホテル・レストランがあります。帰途は船でも都内に行けるルートもあります。車でも来れます。付属駐車場は最初の2時間まで400円で後は30分100円?いずれにしても早く来ないと待たされます。

■クラブは生まれ変わりました

ユーラシアンクラブは、2001年1月10日、特定非営利活動法人ユーラシアンクラブとして生まれ変わりました。考古学、民族学、言語学、人類学等の学術交流促進のための学会「北方ユーラシア学会」(会長 江上 波夫)の活動を踏まえ、2年間の準備を経て、ユーラシアンクラブが創設されたのは1993年2月11日、九段会館で開催した国際シンポジウムの場でした。日本海対岸の極小先住民族の支援をはじめ、中国、ロシアといった大国の狭間に暮らす諸民族にウエートを置きつつ、ユーラシア諸民族の理解、親睦、協力促進のために活動してきました。

新しいユーラシアンクラブは、ボランティアスタッフの協力を第一義的に重視、最近2年間の内部議論の結果、ニュースレターを購読するだけの「会報会員」を停止、正式に「ボランティア会員」「サポート会員」「正会員」の構成とすることに改め、昨年特定非営利活動法人の認証を得て、創設以来の課題であった公益法人化を実現しました。理事6人の役員のほか、10数人のボランティアスタッフが毎月定例のミーティングを行っているほか、週1回月曜定例の企画運営委員会を開催しています。

理解親睦促進の活動では、これまで百数十回のインターカレッジ文化講座、民族誌映像を見る会、写真展、民族料理を食べる会、ユーラシアコミュニケーションフェスティバル、モンゴル、ウイグル、サハ、ウズベクスタン、キルギス、カザフ、タジキスタン、アゼルバイジャン、カルムイクの留学生との親睦や日本理解のためのホームステイの斡旋、親睦旅行など多岐にわたって実施してきました。

協力促進の活動では、原点に戻り、日本に最も近いユーラシア・日本海対岸の沿海地方、アムール流域の先住少数民族ナナイ、ウデゲ等の文化継承、福祉、自立のための活動協力などにウエートを置くほか、帰国した留学生を通じた活動を進めることにしています。法人化に伴い、以上の活動を整理し①ボイスオブユーラシア事業(ホームページとメーリングリストを活用した情報収集と提供の事業)②ユーラシア言語文化塾事業(留学生の協力を得て言語文化を理解する事業)③サウンドオブユーラシア事業(芸能コンサート等を通じた理解促進事業)④ユーラシアンフォーラム事業(講演、ビデオ、スライドを組み合わせた講座系事業)⑤ユーラシア親睦旅行事業⑥ユーラシア支援協力事業などに集約しました。

またこれまでさまざまな施設、地域で点的活動に終わっていたユーラシアンフォーラムや芸能フェスティバルなどの理解促進活動を、系統的に地域で実施することになり、「江東区下町ユーラシア文化ルネッサンス事業」が7月から、5つの文化施設、小学校、地域商店会、社寺、江東区の催しに参加する形で始まります。今後のクラブの活動の方向は下記ようになります。

- ①ボイスオブユーラシア事業
- ②ユーラシア言語文化塾
- ③芸能と通じた理解促進サウンドオブユーラシア事業
- ④ユーラシアンフォーラム: 留学生懇話会、文化講座、ユーラシア紛争地フォーラム
- ⑤沿海地方。アムール流域の極小先住民族の自立支援事業
- ⑥ユーラシアンクラブ親睦旅行
- ⑦地域特別事業「江東区下町ユーラシア文化ルネッサンス事業」

<ヘッドライン>

(トピック)

■7月29日(日)のBBQ 懇親会のご案内

■クラブは生まれ変わりました

(催しもの案内)

■ユーラシアンフォーラム—多民族多文化社会の行方—(ユーラシア留学生懇話会)

(クラブニュース)

■江東区教育長への提案

(ユーラシア現地情報)

■寺澤僧侶からの報告

■ウズベク旅行参加者の感想

(クラブ短信)

■6月3日に留学生フォーラムを開催

■サポート会員・ボランティア会員を募集中

(企画記事)

●<連載>「ユーラシア文化ルネッサンス」の近況 第4回 大野遼

(他団体情報)

■「シベリア・レナ川洪水災害援助基金2001」にご協力を!

★速報★井出さんのカルムイク報告

クラブのボランティアスタッフの井出晃憲さんは、去る5月下旬より6月初旬まで、これまで何度も訪れているロシア連邦のカルムイク共和国に取材旅行で出かけるとともに、帰路モスクワにおいて、クラブと友好関係にある RAIPON(ロシア北方先住民協会)との間で、今後の協力関係について有意義な話し合いを持ちました。

この旅行の報告や RAIPON との話し合いの詳細につきましては、次号で詳細いたします。

カルムイクカスピ海沖でのチョウザメ漁の最盛期(下)



(催し物案内)

■ユーラシアンフォーラム—多民族多文化社会の行方—(ユーラシア留学生懇話会)

第1回

①.テーマ:ウイグル文化と「西部開発」

ゲスト:ミリアリ・ユヌス(亜細亜大学大学院経済学研究科修士課程)

②.テーマ:サハの暮らしと文化

ゲスト:ナターリア・ニューストロエヴァ(千葉大学文学部研究生)

※ナターリアさんは民族衣装で参加して頂けるそうです。

日時:7月15日(日)午後2時~午後4時

場所:江東区森下文化センター

主催:江東区地域振興会 特定非営利活動法人 ユーラシアンクラブ

参加費:500円(資料代等)

※スピーチの後、ゲストとの交流会を実施します

事前連絡の必要はありません。当日受付にて参加費をお支払ください。

開催趣旨:「江東区下町ユーラシア文化ルネサンス事業」の一環として、ユーラシア留学生懇話会「ユーラシアンフォーラム-多民族多文化社会の行方-」を実施いたします。ユーラシア地域の民族文化、社会、言語、習慣について、この地域を出身とする留学生をお招きして講演会を行います。日本にとって遠いようでありながら、実は日本文化とのつながりの深いユーラシア地域について少しでも理解が深まればという思いでこの企画を行います。皆様方の振るってのご参加をお待ち申し上げます。7月以降、毎月1回、森下文化センターで、日本人と文化のふるさとしてユーラシア各地からやってきた留学生を通して、各地の民族文化、暮らし、言語、社会などについて話を聞く「ユーラシアンフォーラム—多民族多文化社会の行方」を実施します。

(クラブニュース)

■江東区教育長への提案

前号で予告した教育長への提案の具体的な内容は以下のようなものです。

1.教師向けプログラム『楽器から知る日本の伝統文化と音楽』/演奏とレクチャー

- ・正倉院の楽器と日本の音楽の特色
- ・三味線伝来の背景と意義
- ・日本民謡とモンゴル歌謡の比較
- ・ウイグル舞踊とカチャシー、日本舞踊
- ・西洋音楽の流入と伝統音楽

・西洋音楽とユーラシアの音楽

2.児童向けプログラム『日本の楽器とユーラシアの楽器』

—ユーラシア諸民族の楽器演奏を日本の音楽がユーラシアの音楽の一部であることを知ってもらう/レクチャー付—

- ・琵琶の演奏と正倉院の楽器 ビデオ付「筑前琵琶」
- ・三味線演奏とコムス、馬頭琴の演奏
- ・日本民謡とモンゴル民謡の比較演奏
- ・シルクロードの楽器、復元楽器と日本の楽器の比較演奏
- ・ヨーロッパの音楽とユーラシアの歌謡の比較演奏
- ・バイオリンと馬頭琴、ラウツプの比較演奏

(ユーラシア現地情報)

■寺沢僧侶からの報告

寺沢氏は五月のカナダを巡錫しました。エドモントでは活発な人権平和宗教のグループによってチェチェン問題を共に考えるタベ参しました。世界各地から移民した若いムスリムの人たちが中心です。また、ベトナム、チベット、タイ、ラオスの仏教僧と共に五月満月の仏誕祭を新築の大きなベトナム仏教寺院にてつとめました。バンクーバーでは全カナダのネイティブ(ファーストネイション)が集まる会議に出席しました。チェチェン民族の存亡の危機を救うために、北米カナダのネイティブピープルの歴史と体験、英知を共有してチェチェン戦争平和解決のために協力を要請しました。二晩つづけてカナダ唯一の最長老の子息や現カナダファーストネイションのグランドチーフと共に、聖なるスウェーセレモニーに参加し、チェチェン平和の祈りを共にすることができました。もう一つの大きな収穫は百年前、日露戦争時にも戦争に参加することを拒否したロシアの信仰深き農民が迫害、処刑、流刑され、八千名近くがカナダに移住しました。トルストイの小説『復活』は、彼らのカナダ移住を助けるために書かれたものです。「ドゥクベル」と呼ばれるロシアの平和信仰者の共同体に招かれ、五月十三日の母の日に共に平和進行しました。彼らもロシアとチェチェンの平和のために共に行動することを誓いました。五月十四日、バンクーバーからシアトルを経、アメリカ西岸のポーランドに数日滞在しています。六年前にアメリカに移住したウクライナのお弟子さんを訪ねています。ドラマのポーランド訪問と偶然にも重なりました。

■ウズベク旅行参加者の感想:テルメズに加藤先生を訪ねて(浦城いくよさん)

この五月の連休に今まで考えたこともなかった旅をする事になった。中央アジアのウズベキスタン共和国—テルメズ、サマルカンド、ブハラ、タシケント—への旅である。

砂漠に囲まれたこれらの街や遺跡はどこを歩いても砂漠は沢山のほこりだったが、至る所に花壇が作られバラの花が咲き乱れていた。

大きな桑の実をつけており、熟した実を木から摘み取って食べるのも楽しかった。

最初訪問地テルメズについて記してみたいと思う。それは私がこの旅への参加を決めた大きな理由がここで仏教遺跡の発掘をしておられる国立民族博物館名誉教授の加藤九祐氏を訪ね、八十歳のお祝いをする事だった。

テルメズの飛行場で加藤さんはニコニコ顔で私たちを出迎えてくださった。日本でお会いする時と違ってよく日焼けされ、はっとする程精悍な感じがした。この飛行場の出口も沢山のバラが咲いていた。

テルメズはウズベキスタン南部国境のアムダリヤ河畔の町である。現在外国人はあまり入れないようで、ただ一つあるホテルは水道管が壊れて水が出ず、トイレもお風呂も使えなかった。七世紀に玄奘三蔵がサマルカンドからテルメズを通り、アムダリヤを渡ってアフガニスタンを経てインドに向かった時は仏教が盛んで多くの寺院があった古い町である。加藤氏は毎年五月前後の三ヶ月ほどここに住んで遺跡発掘の指揮を取っておられる。

ホテルに荷物を置いてすぐ加藤家へ伺った。中庭に面したベランダにある大きなテーブルには、タタール人で四十歳くらいの料理が上手というお手伝いさんにより食事の用意がされていた。ベランダの端には発掘した土器のかけらが大切に置かれていた。氏の八十歳の誕生日を祝う会となるはずだったが、八十歳は来年だということが分かり、来年ここで祝うことになった。

羊の肉と野菜の煮込み、トマトとキュウリ、干しぶどうやいろいろな木の実などがテーブルに並べられ、地ビールで再会を祝う夕食会。この家に住んで発掘に協力しておられるサマルカンドの考古学研究所の方々や、三日前に日本から来られた奥様と東京理科大学の先生と私たち一行五人。加藤さんお得意の「アザミの歌」を皆でしんみりと聴く。

翌日は氏の案内で軍の基地の中にある遺跡へ。発掘現場はアムダリヤの河畔に近く、河の向こうは現在政情不安のアフガニスタンであ

る。「絶えずこちらを観察しているので、決してアフガニスタンにはカメラや双眼鏡を向けてはいけません。鉄砲の弾が飛んでくるかもしれない」と注意を受けた。ウズベキスタン兵の案内で高圧電流の流れる鉄条網を越え、アムダリア河の古い河港遺跡の岸辺で、ほんの二、三分間泥水のアムダリアに手をつけることが出来た。

生活環境は日本から見ると決して良いとはいえないこの土地で仏教遺跡の発掘をされ、あちこちと楽しそうに説明してくださる氏に、古い言葉でいえば男のロマンを見た。奥様もごく最近衣裳史の領域で学位を取られたと夕食の時、氏がうれしそうに話された。老後を如何に生きるかいろいろ議論されているご時世だが、何かひとつ好きなことを一生懸命に打ち込むことがその人を生き生きと美しく見せることだと分かってはいたが改めて思った。

(福井伸彦さん)

ウズベキスタンは私にとって二度目の訪問であった。

一回目は1997年8月。サマルカンドでもブハラでも、なにしろ屋過ぎには三十五度を超える猛暑に如何ともしがたく、見るもの聞くもの、ほとんど頭に入らない始末だった。

せっかく憧れのチムールの都にやってきたのに、これではどうにもならない。もっと涼しい時期にもう一度来て、じっくり見学しようーと、再訪を決めていた。そして、今回のツアーは五月連休の時期なので、かなり涼しいに違いないと考え参加した。ところが、五月のウズベキスタンは暑かった。早朝でも二十度を越え、午後になると三十度オーバーの毎日であった。

五月三日早朝、私たちはサマルカンドの目抜き通りを、バザールめざしてあるいていた。ちょうど登校時間らしく、揃いの白いカッターシャツに黒ズボン、ランドセルを背負った小学生たちが、連れ立って小走りに私たちの脇を通り過ぎていく。日本の子供たちに比べて、背が低めで体つきもほっそりしている。

そんな彼らを目の端に溜めて歩いていると、すぐそばで「ハロー」と小さな声が聞こえた。あれっと思って振り返ると、目の大きな小学生の男の子の、ちょっとはにかんだような笑顔があった。私たちが外国人の観光客だと分かって、覚えてた英語で呼びかけてくれたのである。慌てて「オーハロー、ハウアーユー」と言葉を返すと、彼はうれしそうに指でVサインをして、走り去っていった。彼の屈託のない仕草に、私は初夏のサマルカンドの町に吹き抜ける、涼風のような爽やかさを感じた。

帰国して改めて思い返してみると、今回は、子どもたちのいい笑顔に、何回も出会ったツアーだった。ブハラのホ



お元氣な加藤先生を囲んで

テルのすんなりと足の伸びた美しい少女も、陶芸の里ギズドバンのちびっこ姉妹も、乙女の含羞を湛えながら「グッドモーニング」と笑いかけてくれた。

その極めつきは、ギズドバンで招かれた地域の人たちのお祝いの席だった。この地域では、家族に長男が生まれて一歳の誕生日を迎えると、老人から子どもまで住民全員が近くの公園に集まって、深夜まで飲めや歌えの大宴会を開くのが習わしだという。

美貌の歌姫が舞い、ローカルテレビのカメラが回る中で、設けられたテーブルには、大人たちのウォッカと子どもたちのジュースが隣り合った林立し、子どもも大人も分け隔てなく、食べて飲んで夜が更けるまで、それこそ無礼講の大騒ぎを繰り広げていた。

子どもたちは、私がカメラを持っているのを目敏くみつめて、写真を撮ってほしいと集まってきた。彼らにとって写真を撮ってもらうのは、非常に稀で貴重な体験なのだろう。みんなうれしさが目が輝いている。しかも驚いたことに、おじいさんやおばあさんまでが、子どもたちといっしょにカメラの前で笑っている。

私はこのシーンに、地域の一体感の現れをみた。大人も子どもも一つになって働き、楽しむ。そんな地域生活のあり様がここにある。私が、今回のツアーで出会った爽やかな子どもたちは、こういう生活の中で育てられているのだと直感した。

帰国してみると、どこかの国の暴君の豚児が、偽造パスポートで日本に入国しようとしてたり、若い母親が幼い子どもを虐待死させるなど、“子ども”をめぐる気の滅入るような話題が付きない。それにひきかえ、沢山のすばらしい子どもたちに出会うことのできた今回のツアーは、気温は多少暑かったものの、とても清々しい旅であった。

●＜連載＞“ユーラシア文化ルネッサンス”の近況 第4回 大野遼

第1回国際ユーラシア芸術祭と「ユーラシア芸術文化の日」

私の夢の一つが思いがけない所で適うことになった。「江東区下町ユーラシア文化ルネッサンス事業」に文化庁の助成が決まり実現することになった「第1回国際ユーラシア芸術祭」のことである。

忘れもしない。1989年頃。まだ新聞記者で、文部省記者クラブ詰めでしていた。VMシリーズのパソコンを購入してこれを道具にし始めたばかり。私の字は「三筆」と称されたほどの悪筆で、我ながら自分の書いた字が読めないこともしばしばであった。私はこのパソコンをワープロ代わりに、深夜遅くまで文部省に残っていた。アルタイ山脈で聞いた一弦の弾語り。シベリアの口琴演奏、民朴で聴いたオルティンドー。真っ青な北方ユーラシアの空と人々の顔を浮かべながら、いつかユーラシア芸術祭をやろうと、企画書を書いていた。イメージどおりの構想がパソコン画面に浮かんでくる。「三筆」の手ではとてもできない芸であった。話はずれるが、パソコンを使うようになって、同時並行でいくつもの仕事ができるようになった。「ユーラシア芸術祭」。数年後ユーラシアンクラブが立ち上がったときには、クラブの将来の活動の一つとしてできる時期が来るだろうと信じていた。

もっとも、新聞もテレビも、日本人の誰もが「ユーラシア」という言葉を使っていない頃であった。10年後、政府の施策の中で「ユーラシア外交」が語られ、学習指導要領の中にユーラシアが視野に入るなど

思いも拠らなかつた。2年後の本発掘目指して、加藤九祚先生、加藤晋平先生と一緒に毎年アルタイ山脈に通い、スキタイ時代のバジリク古墳の発掘準備に終わっていた。結局、その延長線上で新聞記者を辞めて、ユーラシア諸民族の交流と行方定めがたい人類の未来を考えるためユーラシアンクラブを提案するのだが、その年に旧ソ連が突然崩壊した。アルタイ山脈で百人近い学者が調査に従事しているときだった。学術の交流とは別のもう一つの柱が芸術祭だった。ユーラシア各地のアーティストの顔が浮かぶようにならないとちょっとやそつでは実現しない。しかし幸いにその後、国内外で優れたアーティストに出会うことになった。先年、サマルカンドで国際芸術祭を鑑賞した。この演出を手がけたのは、ウイグル生まれのウズベク人。日本人女性の血筋も受けた怪傑豪快な女性ハリダだ。すばらしい野外舞台だった。私は彼女とは違う舞台を作ろうと思う。第1回国際ユーラシア芸術祭は、どんな舞台になるか。夢が人々の心の中で自己増殖していくような、そんな刺激のある感動的演奏を聴いてもらいたい。

江東区における芸術祭に向けた稽古と交流ライブの日、それが「ユーラシア芸術文化の日」(毎月第三水曜日)である。地元の演奏家、ボランティアスタッフが、交流し、知恵を集めて3月10日のメインフェスティバルを成功させたいと思っている。楽しみながらやりたい。夢を見よう。夢はいつか実現するものなのだ。

(クラブ短信)

■6月3日に留学生フォーラムを開催

留学生フォーラム準備会ということで、留学生に声をかけて集まりましたが、内モンゴルのタラーさん、ウズベクのガイラットさんが用事でこれず、ウイグル人留学生4人と原田、森本、向坂、それに以前メールでアクセス、お会いした安藤 宣広君が参加し、話し合いました。ウイグル人留学生は、東京芸大のウメルさん、芝浦工大のウィルダンさん、亜細亜大学のミリアリさんに明星大学に今年留学したカエサルさんの4人。ウメルさん、ウィルダンさんは旧知ですが、ミリアリさんとカエサルさんは初の面識でした。ウメルさんには、江東区下町ユーラシア文化ルネッサンスで、モンゴルのバイラさんと一緒に音楽芸能企画の中心になっていただこうと思っています。来年3月に向けて、どのように組み立てていくか、6日午後相談したいと思っています。ウメルさんやウィルダンさんによると、留学生のアルバイト先を探すのが大変困難になっているそうです。日本では生活費が高く、授業料も他国の中で飛びぬけていると言います。ウズベキスタンの国費留学生が、今年から「原則大学院留学のみ。学部留学生は撤退」を決めたのもそれが理由でした。日本の留学生に対する費用で、ドイツ留学生は3-4人を派遣できると言います。10数年前、留学生受け入れ10万人計画が文部省から提案されましたが、いまだに実現していません。殖民統治国：先進国の責任において、留学生受け入れ条件を向上させることは、現地へのジャイカ等の支援金以上に、重要な意味があると思います。われわれが、留学生を通してユーラシアを理解し、留学生を支援することは、多民族多文化社会の未来の枠組みに影響を与えることになると思います。

■サポート会員・ボランティア会員を募集中

NPO 法人化に伴い、クラブの会員規定も変更になりました。年会費1万

2千円によって経済的に支えていただくサポート会員と、スタッフとしての活動でクラブを盛り立ていただくボランティア会員を随時募集中です。両会員の二重登録も可能です。なお、このニュースレターはサポート会員の方にのみお送りしています。皆さまお誘い合わせの上ぜひご登録ください。お問い合わせ・ご登録はクラブ事務局まで。登録用紙をご用意しています。また会員登録はホームページ上でも可能です。

○編集後記

今回、井出氏の代わりとして、ニュースレターの編集を行いました。といっても記事を集めただけで、最後の直しは井出氏に任せてしまったところがあるので、どれだけ役に立てたか、分かりません。こうして実際に編集の仕事に携わって、本当に大変な仕事だということがいかりました。これからも非力ながら協力していきたいと思います。(か)

カルムイキアでの夢のような半月の旅を終え、また東京での日々の用事に追われる毎日です。今回の訪問ではカルムイキアおよびモスクワにおいて、クラブの情報ネットワーク整備に関して実りある話し合いを行うことができました。このレターを始めとしたクラブの情報発信の今後の発展に期待したいと思います。次号よりしばらくお休みしていた「ユーラシア人物往来」を再開します。(い)

発行: NPO 法人ユーラシアンクラブ

発行人: 大野遼 編集人: 片野竜太郎・井出晃憲

2001年5月1日発行

住所: 〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-13-2 第1広田ビル

電話 / ファックス: 03-5371-5548

E-mail: PAF02266@nifty.com

Homepages: <http://homepage1.nifty.com/EURASIANCLUB/>

(他団体情報)

■「シベリア・レナ川洪水災害援助基金2001」にご協力を!

新聞テレビの報道でご承知のように、今年5月、シベリアの大河レナ川が氾濫(はんらん)し、大洪水が起きました。ロシア連邦サハ共和国で、人命や国民の財産、公共施設に大きな被害がでています。ニュース番組は、首都ヤクーツク市の水没した住居の屋根でろうじて暮らす市民の姿を映しだしていました。

今春のレナ川洪水は、過去数百年間において最も大きな規模であり、上流地域だけに限っても70の町や村、24000人が被災したと報道されています。極寒のシベリアでは凍結した河川に、上流からの雪どけ水が押し寄せて洪水となるのですが、今後、下流への被害拡大が予想されています。

ロシア連邦サハ共和国はシベリアのタイガ・ツンドラと永久凍土におおわれた北半球で最も寒い地域です。ロシア人のほかに先住民であるサハ(ヤクート)人やトナカイ遊牧を行うエヴェンキ人、エヴェン人などの北方少数民族などが住んでいます。

洪水によって多くの人が住宅が失い、また水道や電気などのライフラインにも被害は及んでいます。現地では5月末、非常事態宣言が発せられ、被害の把握と復旧に懸命の作業が続いています。しかし、その努力も資金や資材の不足ではかばかしくなく、何もかもが困難な状況にあると、訴えの声が届いています。

皆さま、サハ共和国の人々の洪水被災を援助するため、募金をしていただけないでしょうか。これまで、サハに関わりのあった方々、はじめて「サハ共和国」を知った方々、心ある多くの方々にご支援をお願いいたします。

■募金額と募集期限

個人一口2000円 法人団体一口5000円

* 2001年8月31日で締め切らせていただきます。

■応募方法 (下記の郵便振替口座にお振り込みください。)

■振込先

郵便振替口座名称(加入者名):

シベリア・レナ川洪水被害援助基金2001

口座番号: 02230-5-48577

* なお、振替用紙の住所氏名欄には、電子メールアドレスがあればご記入下さい。

皆様からいただいた募金は、北方圏フォーラム(事務局、米国アラスカ・アンカレッジ)を通してサハ共和国政府へ寄付することになっています。これは北方圏地域の州・省など地方政府で構成され、サハ共和国も加入している国際的な常設組織で、日本では北海道がメンバーになっています。今回の洪水被害に関して、同フォーラムはサハ共和国の関係省庁と連携し、災害援助のための募金を呼びかけております。

(<http://www.northernforum.org/News/index.htm>)。私たちの募金活動はこうした要請に応えるものです。

皆さまからいただいた募金は、食糧・毛布・テントなど、被災者が緊急に要する物資の購入とライフラインの復旧に使われる予定です。

以上、緊急の募金をお願いしますが、何卒私たちの趣旨をご理解の上、ご協力いただけるようお願いいたします。

■事務局:「シベリア・レナ川洪水災害援助基金2001」

高倉浩樹(代表)、寺田達夫、山下宗久

連絡先 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学・川北合同研究棟410 高倉研究室気付

電子メール 山下: muyama@mtd.biglobe.ne.jp (2001年7月5日まで)

寺田: yy2t-trd@asahi-net.or.jp

高倉: SGW02162@nifty.ne.jp (2001年7月6日以降)

* 私たちはサハ共和国で学術調査や文化交流に取り組む研究者、ジャーナリストです。現地で、多くの友人や知人が今回の洪水によって被災したため、募金活動に立ち上がりました。

■洪水被害に関するサハ共和国政府による公式発表は以下のURLアドレスで閲覧できます。<http://www.sakha.gov.ru/>

